

日本では狂犬病は見られませんが、海外では年間5万人を超える方が亡くなっています。狂犬病ウイルスを媒介するのは、イヌをはじめとする哺乳類です。地域により、コウモリ、アライグマ、キツネなどが原因となることもあります。

狂犬病は、狂犬病ウイルスに感染した動物に噛まれた後、1~3ヶ月の潜伏期において、発熱、食欲不振、受傷部位の痛みなどが起こります。その後、急性神経症状(不安感、恐水および恐風症状、興奮性、麻痺、幻覚、精神錯乱など)が出現します。そして昏睡に至り、呼吸障害によりほぼ100%亡くなります。

### 世界各地の狂犬病媒介動物



### 予防

#### 噛まれた後発症を抑えるために行う暴露後狂犬病ワクチン接種

噛まれた場合はできるだけ速やかに医療機関を受診し、傷の手当てを受けてください。その国の方法でワクチン接種などが行われます。

医療機関が近くにある、或いは動物に接する危険の低い方は、この対処でいいと思います。

#### 噛まれる前に行う暴露前狂犬病ワクチン接種

(WHOが2018年4月に狂犬病ワクチン接種の接種スケジュール変更を行いました。

当院でもそれに準じて、スケジュール変更しました。)

##### ●輸入ワクチンを使用する場合

初回接種を0日とし、7日後に2回目を接種します。2回の接種で終了です。

現在、輸入ワクチンが手に入りにくいので、2回分のワクチンを確認した後接種します。

咬まれた場合は、暴露後接種が必要です。海外のドクターに知られているワクチンのため、その国で決まった対応をしていただけます。

国の補償制度が利用できないので、副反応には輸入ワクチンの補償制度での対応になります。

##### ●国産ワクチンを使用する場合

初回接種の後、2~4週間後に2回目、半年空けて3回目を接種します。

日本独特のワクチンなので、海外のドクターにはあまり知られていません。

2回接種の後噛まれた場合、不十分なワクチン接種とみなされ、未接種の場合と同じように対応される可能性があります。3回目まで接種して渡航できる方にお勧めです。

3回目まで接種していても、噛まれた場合は暴露後接種が必要です。

副反応には、国の補償制度が利用できます。

ご質問のある方は、当センター スタッフまでお問い合わせください。

だいどうクリニック 予防接種センター